

テトスへの手紙1章16節 「言ってるのとやっってるのが違う信仰？」

1A 「神を知っている」という公言

1B 思い込み

1C 敬虔の装い

2C 宗教的義務

2C 預言や奇跡

2B 預言者バラムの例

1C 霊的な語り

2C 邪悪なバラムの教え

3B 行いによって明らかになる信仰

1C 結ばれる実

2C 従順のない信仰

3C 言葉だけの人

2A 行いによる否定

1B 交わりにおける「知る」

1C 父なる神の御霊

2C 従順による愛

2B 忌まわしさ

本文

テトスへの手紙を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、テモテへの手紙を終えて、テトスへの手紙に入ります。午後礼拝で、1章を一節ずつ見て行きますが、今朝は最後の節、16節に注目してください。「**彼らは、神を知っていると公言しますが、行いでは否定しています。彼らは忌まわしく、不従順で、どんな良いわざにも不適格です。**」

1A 「神を知っている」という公言

テトスへの手紙は、テモテへの手紙と同じように、教会の監督を任されたテトスに対して、パウロが教えているものです。そして、その背後にある問題も似ています。10節をご覧ください、「**実は、反抗的な者、無益な話をする者、人を惑わす者が多くいます。特に、割礼を受けている人々の中に多くいます。**」知識をふりかざして、違ったことを教える者たちがいました。そして、その教えによって、敬虔な生き方へと人々が導かれるのではなく、むしろ、家庭が破壊されているという、知識とは裏腹なことが起こっていたのです。

ですから、「**彼らは、神を知っていると公言しますが、行いでは否定しています。**」と、パウロが言っています。公言しているということ、発言しているということが、必ずしもそうではないことがあります

す。神を知っていると言っていることが、そのままその人が神を知っているとは限らないのです。本当に神を知っているのかどうかは、その人の行いに現れます。行いが否定しているのであれば、神を知っているという発言は空しいものです。

1B 思い込み

1C 敬虔の装い

パウロは、テモテに対して、こう教えていました。「Ⅱテモ 3:5 見かけは敬虔であっても、敬虔の力を否定する者になります。こういう人たちを避けなさい。」自分だけを愛しているのに、言うことは、とても霊的です。金銭を愛しながら、敬虔を装います。情け知らずで、人と和解せず、中傷し、自制できずにいるのに、それを神の名で行っています。こういった者たちを、避けなさいとパウロがテモテに勧めています。

けれども、問題は、こういったことをしている人たちは、本気で自分は神を知っていると思っているのです。むしろ、自分こそが神を知っていて、他の者たちが知らないから、俺が教えてやっているのだと高ぶっています。

2C 宗教的義務

イエス様は、ご自身が十字架につけられる直前に、弟子たちに、あなたがたも迫害を受けますと前もって伝えました。「ヨハ 16:2-3 人々はあなたがたを会堂から追放するでしょう。実際、あなたがたを殺す者がみな、自分は神に奉仕していると思う時が来ます。彼らがそういうことを行うのは、父もわたしも知らないからです。」ユダヤ人の宗教指導者らが、弟子たちを殺すのが神に奉仕しているだと思っているのです。自分が神を知らないなどと、全く思っておらず、知っているからこそ、弟子たちを迫害しようと考えています。しかし、イエス様は、真実はその逆で、彼らが父なる神もご自身も知らないから、そのようなことを行えるのだと言われています。

彼らは、宗教的儀式に熱心だったので、自分が神を知らないはずはないと思っていたはずですが。私たちも同じように、教会や信仰の活動に熱心であれば、それが神を知っているということになると思ってしまう。けれども、その人が神を知っているかどうかは、その行いに現れるというのが、聖書の教えです。神を知っていれば、その分、神を敬い、その命令を守るはずですから。

2C 預言や奇跡

そして、終わりの日には、多くのしるしや不思議があり、偽預言者がそれらを行うことを、イエス様は予め語られました。イエス様の名によって、奇跡を行っているのであれば、その人はイエス様を知っていると思ってしまう。けれども、そうではないことを主は語られます。「マタ 7:21-23 わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。その日には多くの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多

くの奇跡を行ったではありませんか。』しかし、わたしはそのとき、彼らにはっきりと言います。『わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。』

ここでは、はっきりと、イエス様を主と呼んでいる人々が、その御名によって奇跡を行っています。それにも拘らず、イエス様は「わたしはおまえたちを全く知らない」と断言されるのです。ですから、次の言葉がとても大事です。「不法を行う者たち、わたしから離れて行け。」不法を行っている、というところに、彼らがイエス様と無関係の人間なのだとすることを証しています。イエス様を知っているというのは、その命令を行っているかどうかによって、はっきりしているのです。

2B 預言者バラムの例

そこで、新約聖書では、言っていることは立派でも、やっていることによって否定している人物の例として、バラムが出てきます。モアブの王バラクに雇われて、宿営しているイスラエルを呪うように雇われた人です。

1C 霊的な語り

バラムの特徴は、その語りは非常に霊的だったということです。彼は、まともなことをたくさん語っています。バラクから、たくさんの金銀をもった家臣たちがやってきました。彼は、「民 22:18 しかし、バラムはバラクの家臣たちに答えた。「たとえバラクが銀や金で満ちた彼の家をくれても、私は私の神、【主】の命を破ることは、事の大小にかかわらず、断じてできません。」そして、モアブまで行った時に、イスラエルの宿営を見て、いけにえを献げた後、語る言葉は、イスラエルを呪うのではなく、祝福するものでした。三度目に語った時は、メシアが来られる預言までしているのです。「民 24:15-17 ベオルの子バラムの告げたことば。目の開かれた者の告げたことば。神の御告げを聞く者、いと高き方の知識を知る者、全能者の幻を見る者、ひれ伏し、目の開かれた者の告げたことば。私には彼が見える。しかし今のことではない。私は彼を見つめる。しかし近くのことではない。ヤコブから一つの星が進み出る。イスラエルから一本の杖が起こり、モアブのこめかみを、すべてのセツの子らの脳天を打ち砕く。」

2C 邪悪なバラムの教え

ところが、彼は、他のミディアン人の王たちと共にイスラエル人たちによって殺されています。新約聖書では、「バラムの教え」として、それがいかに邪悪な教えであるかを教えています。なぜか？彼は、言っていることは全く正しいのですが、やっていることが不義に満ちていたのです。

先ほど、バラクの家臣たちが金銀を持ってきた時に、彼はきっぱり断っていますが、けれども、モアブのところに行ったのです。金銀欲しさで行ったのです。神が、バラムに、「彼らと一緒に行け。」と命じられたとありますが、これは、彼が金銭を貪って、どうしても行くと決めていたので、それで神は、彼の欲するままにさせただけです。主は御怒りを燃やして、主の使いが抜き身の剣をもって、彼の道に立ちはだかりました。彼の乗っているろばだけが、主の使いを見ることが出来ました。バ

ラムは激しく、ろばを叩きます。主はついに、ろばの口を開かれました。そして、バラムに、主の使いがいるのを見せたのです。

それで、モアブの王バラクに会って、イスラエルを呪うべく動いたのです。しかし、主ご自身が介入されて、その呪いを祝福に変えたに過ぎませんでした。バラクは怒りました。バラムは答えました。「24:12-13 私は、あなたが遣わした使者たちにも、こう言ったではありませんか。『たとえバラクが私に銀や金で満ちた彼の家をくれても、【主】のことに背くことは、良いことでも悪いことでも、私の心のままにすることはできません。【主】が告げられること、それを私は告げなければなりません。』」やはり、真っ直ぐな、正しいことを言っているのです！

ところが、次の章、民数記 24 章を見ますと、とんでもないことが起こります。民の宿営しているところに、モアブの娘たちがやって来て、イスラエルの男たちと淫らなことをしたのです。そして、彼女たちが持ち込んだ神々の前で食事をして、民がその神々を拝んだ、とあります。それで、神罰が下りました。2万4人も死んだのです！祭司の子ピネハスが、介入して、大胆不敵に淫行を犯している男女を剣で殺さなければ、もっと人々が死んでいたことでしょう。

これを「バラムの教え」と呼んでいるのです。一見、ずっと尤もなことを言っているのですが、彼はバラクに、女たちをイスラエルの宿営に送り、イスラエル人たちが偶像礼拝と淫行の罪に陥れば、主ご自身が彼らを呪われるという助言をしていたのです。ペテロは、第二の手紙でバラムの不義をこう断じています。「Ⅱペテ 2:15-16 彼らは正しい道を捨てて、さまよっています。ベオルの子バラムの道に従ったのです。バラムは不義の報酬を愛しましたが、自分の不法な行いをとがめられました。口のきけないろばが人間の声で話して、この預言者の正気を失ったふるまいをやめさせたのです。」同じように、ユダも手紙の中で咎めました。「ユダ 11 わざわいだ。彼らはカインの道を行き、利益のためにバラムの迷いに陥り、コラのように背いて滅びます。」

そして、イエス様が、ペルガモンにある教会に対して語られたのです。「黙 2:14 けれども、あなたには少しばかり責めるべきことがある。あなたのところ、バラムの教えを頑なに守る者たちがいる。バラムはバラクに教えて、偶像に献げたいけにえをイスラエルの子らが食べ、淫らなことを行うように、彼らの前につまずきを置かせた。」言っていることは尤もであっても、やっていることが金銀を愛して不義を行っていたのです。しかし、やっていることがイスラエル人をつまずかせているということで、教会につまずきをもたらす教えとして、イエス様は警告しておられます。

もし神は信じないと言っている者であれば、キリスト者は、その人がしていることに同調しようとは思いません。けれども、神とキリストの名を使い、正しいことを言っている者であれば、そそのかされて、その人のしていることに同調して、悪いことを行ってしまうのです。テモテとテトスは、そういった人々に対処しなければいけませんでした。言葉の争いがありました。家々で女たちをたぶらかして、罪を犯させていました。金銀を愛していました。見るところ敬虔だからこそ、神を知って

いると公言しているからこそ、つまずきが大きく、それゆえ悪なのです。これが、バラムの教えです。

3B 行いによって明らかになる信仰

私たちは、神のみことばを聞いて、それを信じて救われます。行いによって救われるのではありません。しかし、信じて救われた者は、悔い改めの実を必ず結びます。その人が、確かに救われた人であることが、その行いにおいて明らかになるのです。

1C 結ばれる実

バプテスマのヨハネは、「悔い改めにふさわしい実を結びなさい。(マタイ 3:8)」と言いました。イエスは、神のことばと私たちの心の受け入れの関係を、種蒔きの喩えで語られました。みことばを聞いているのですが、どのように聞いているのかが問題なのです。聞いても、表面的であれば、試練があると信仰から離れます。聞いても、世の思い煩いや富の惑わしがあれば、実が結ばれません、良い地に落ちた種だけが、30倍、60倍、100倍の実を結びますが、「彼らは立派な心でみことばを聞いて、それをしっかり守り、忍耐して実を結びます。(ルカ 8:15)」とあります。聞いたみことばを、聞き過ごすのではなく、心で留めます。そして、いろんなことが生活や人生で起こっても、それでもそのみことばを信じます。そうやって忍耐している中で、神が実を結ばせてくださいます。このようにして、その人に良い行いとなって、みことばを信じて受け入れる中で現れてくるのです。

2C 従順のない信仰

福音を聞いて、信じるというところには、従順がともなうのです。福音を宣べ伝えているのは、「すべての異邦人の中に信仰の従順をもたらすためです。(ロマ 1:5)」とパウロは言いました。信仰は聞くことから始まり、聞くことは神のことばによるのですが、その聞いているところに、従順がともなっているのです。

従順のない聞き方があります。そして従順な聞き方があります。飛行機に乗られた方は、離陸する時に安全のためのアナウンスがあります。何度も乗っている人は、聞いていますが、聞いていません。けれども、上空にいる時に乱気流に巻き込まれたとします。そして、酸素マスクが天井から降りて来たとします。客室乗務員が同じことを話します。その時は、客室乗務員の言うことを、聞くでしょう。その一言一言が、自分を救うことになるからです。これが従順をとまなう聞き方です。

3C 言葉だけの人

ヤコブは、言葉だけで神を信じていると言っている人について、手紙の中で警告しています。「ヤコブ 2:17-19 同じように、信仰も行いが伴わないなら、それだけでは死んだものです。しかし、「ある人には信仰があるが、ほかの人には行いがあります」と言う人がいるでしょう。行いのないあなたの信仰を私に見せてください。私は行いによって、自分の信仰をあなたに見せてあげます。あなたは、神は唯一だと信じています。立派なことですが、悪霊どもも信じて、身震いしていません。」悪霊でさえが、そうです、神は唯一だと信じています。福音書に、悪霊にとりつかれた者たち

が、イエス様を見て、「神の子」「聖なる者」と叫んでいます。まさに、その方なのです。しかし、彼らは救われるのでしょうか？いいえ、むしろ行いにおいては反逆しているので、滅びるのです。

2A 行いによる否定

1B 交わりにおける「知る」

ここにおいて、神を知っているというのが、一体どういうことを指しているのかを知る必要があるでしょう。それは、「交わり」において知っているのです。アダムが、エバを知ったという時の知るです。同じように、神を知るというのは、御父と御子の交わりの中に入るということなのです。「Iヨハ1:3 私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。」

1C 父なる神の御霊

私たちは、父なる神を知るという時に、この方は父ですから、従順な子どもとなるのです。神の言われる命令に従順に従うのです。この方を父と知っているならば、人格的に、霊的に知っているのですから、そうするのです。知識だけで、あるいは感情だけで知っているのであれば、従順が生まれません。父を知っているならば、この方に言われることに従うはずです。「エペ 5:1 愛されている子どもらしく、神に倣う者となりなさい。」

2C 従順による愛

そして、私たちは子なるキリストに愛されています。この方の愛を知ったならば、この方を愛するはずです。そして、この方を愛すならば、この方の命令にも従いたいと願うはずです。主が言われました。「ヨハネ 14:15 もしわたしを愛しているなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」

2B 忌まわしさ

こうして、神を知っていると知っていることが、行いによって現れることを見ました。その反対に、そのように公言している者が、行いで否定していたら、いかに忌まわしいかを見ました。パウロが、このような者たちが、「**彼らは忌まわしく、不従順で、どんな良いわざにも不適合です。**」バラムの教えのように、人々に多くのつまずきをもたらします。忌まわしいです。そして、不従順ですね。神を知っていると知っていることで、従順を証明しません。むしろ、神を知らないと言っている者と変わらず不従順です。そして、不適合な人です。神を知っている者たちが、良いわざに富んでいるのに対して、どんな良いわざでも不適合なことを行っています。彼らは、神を知らないのです。

最後に、パウロがテトスに、このような者たちを避けて、自分に任されている人々には、次のことを教えるように命じています。「テトス 2:14 キリストは、私たちをすべての不法から贖い出し、良いわざに熱心な選びの民をご自分のものとしてきよめるため、私たちのためにご自分を献げられたのです。」神の救いは、全くの憐れみです。その憐れみによって、私たちは不法から出てくることができました。そして、良いわざに熱心になる選びの民となったのです。争いや中傷、貪欲とは無縁の人種なのです。この恵みの中に生きて行きましょう。